

旅



こやま けんいち

楼蘭

匈奴や漢との戦いに

楼蘭は多くの人を失った

兵士達の墓標はない

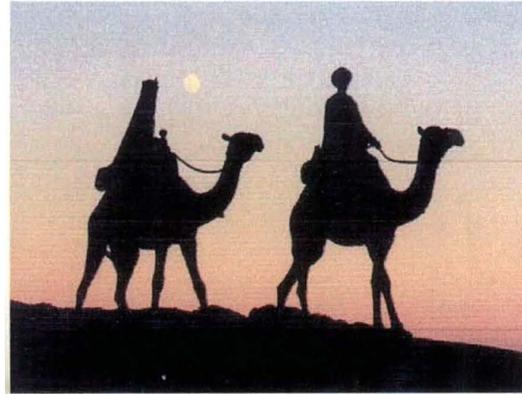
王女の胸を飾ったものが

城址から取り出された崑崙の珠

面影を偲んで空を仰げば

砂漠の月は何故か赤い

こやま けんいち先生には会誌十三号に
「思いつくままに―千里第二小学校在職十三年―」を
ご寄稿頂きました。



青函連絡船

喜びと悲しみと

人それぞれの想いを載せて

北へ帰る

青函連絡船八甲田丸の窓の灯りに

また来るからねと

手を振りながら帰ってきた

遠い旅の日の記憶



牛窓の旅

ひとり旅の楽しみは

道連れとの出会い

牛窓本連寺の石段に腰を下ろし

瀬戸の海を眺めていたら

声かける旅人のいて

忘れ得ぬ暫しの語らい

夢二や長船 備前焼のこと

橋

橋の向こうに虹があると信じ

誰もがひたすらに励んだ昔があった

昭和二十年八月十五日

みんなは揃って向きを変え

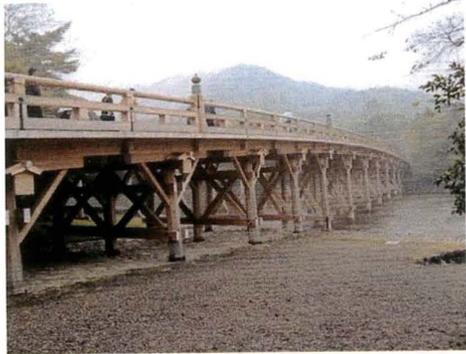
疲れ果てた顔でこの橋を戻ってきた

戻らない人もいた

橋は今も無表情で川を跨ぎ

向こう岸からの

帰らぬ人を待っている



沖繩

誰が捧げるのか

姫ゆりの塔の

御霊の前の白百合の花

健児の塔に千羽鶴

摩文仁の丘は

訪ねる人の絶えることなく

連なる碑に鎮魂の香煙たなびく

星流れて六十有余年

海やかりゆし名城の浜辺に

戦争を知らぬ若者たち

この夏も集い

波と戯れ星砂拾う



御母衣タム

白川街道をひた走る観光バス

窓の外を眺めながら

御母衣はもう春ですわねえ…と

隣の旅人がつぶやく

村を離れる日に皆で植えたという

湖畔の葉桜が風と語らう声

さわ さわ さわ さわ



青島暮色

日南の海の畔

青島の宿は

潮騒を遠くに聞き

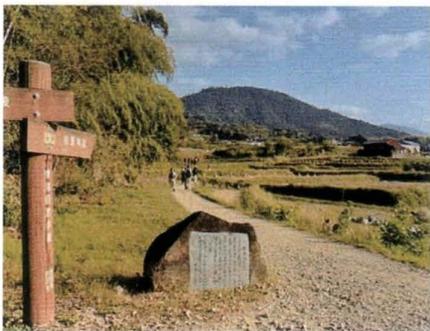
今夕日が沈む

いで湯のくもり窓に

指先でたどる

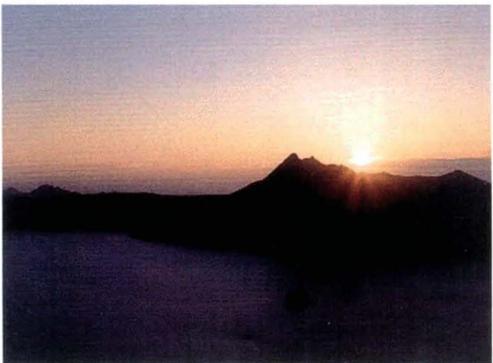
独り旅の

果たせなかった今日のプラン



山辺の道

山辺の道に入相の鐘
 あれは長岳寺あたりか
 風が秋を運ぶ
 道すがら訪ねた環濠の館に
 古人を偲びつつ
 旅人は
 終着の桜井へ向かう



摩周湖

北国のひとり旅は
 今 摩周湖の畔
 ごらん 湖の遙か向こう
 東の稜線が輝く辺り
 神々の夜明けがはじまる
 この荘厳を君に贈ろう



お瀬路さん
 比良八荒が治まると
 琵琶湖は 大津の港から
 宝厳寺詣での船が出る
 西国観音霊場巡りに向かい
 お瀬路さんの鈴の音
 ついばふ乗せ
 今年も竹生島へ春を運ぶ



夜行列車
 発車のベルが鳴るのに
 プラットホームに人影なく
 最終の夜行列車は
 テールランプの小さな灯り点し
 はぐれた過去を探しに
 線路の先の暗がりへ
 今 独りぼっちで旅立つ